平成30年度の試行調査（プレテスト）の分析・検討結果について（概要）

１．趣旨とねらい

記述式・マーク式の問題の検証に加え、実施運営面を含めた総合的な検証を行うため、全国の大学等を会場として実施。

問題の作成に当たっては、平成30年６月18日付の通知のとおり、大学入試センター試験における問題評価・改善の蓄積を生かすことや、大学教育の基礎力としてどのような知識・技能や思考力・判断力・表現力を問うのかというねらいを明確にすること、高校において「どのように学ぶか」を踏まえることなどを基本的な方向性とした。今回の試行調査では、上位層の識別も含めた多様な識別を図ることを意識し、マーク式問題の目標平均得点率（平均正答率）を５割程度として設定。

２．実施期間等と実施科目等

◇平成30年11月10日（土）～11日（日）

●協力校数：1,453校　●受検者数：68,409人（実人数）

●試験場数：全国の各大学528試験場（Ａ日程とＢ日程の延べ数）

●実施教科科目等：

Ａ日程・・・国語、数学①（数学Ⅰ・数学Ａ）【高校２年生以上】

Ｂ日程・・・国語、数学①（数学Ⅰ・数学Ａ）、数学②（数学Ⅱ・数学Ｂ）、地理歴史科（世界史Ｂ、日本史Ｂ、地理Ｂ）、公民（現代社会、倫理、政治・経済）、理科①（物理基礎、化学基礎、生物基礎、地学基礎）、理科②（物理、化学、生物、地学）、英語（筆記[リーディング]及びリスニング）【原則高校３年生】

３．分析・検討方針

・各科目の問題構成、設問数、内容等の在り方

①科目ごとの平均得点率（平均正答率）等と得点の分布②設問ごとの正答率や誤答の選択状況、③設問ごとの五分位図、④設問ごとの識別力（※）を参考にした分析

※　科目の正答率から当該設問を除いたものと当該設問の正答率とのピアソン相関。

・記述式問題

①正答の条件と成績表示の在り方、②採点及び検収の体制及びスケジュール、③解答方法、答案の読み取りの分析

・マーク式問題を含めた成績表示の在り方

試行調査の結果を活用して、①安定的な成績表示、②追・再試験の成績表示の在り方等を中心に検討

・実施面の課題検証とその解決

記述式問題の導入やリスニングにおける読み上げ回数が異なる問題の課題の洗い出しや当てはまる選択肢を全て選択する問題の実施面での課題の検討

問題構成や内容等の在り方

（マーク式問題）

○５割程度の平均得点率を念頭に実施し、全19科目等のうち7割を超える14科目等において、5割程度以上を達成する結果となった。

○５割程度を下回った5科目の分析結果は以下の通り。

＜数学（数学Ⅰ・数学Ａ、数学Ⅱ・数学Ｂ）＞

すべての大問において数学的な問題発見・解決の全過程を重視して出題した結果、問題全体の分量と試験時間のバランスに課題が残ったものと考えられる。思考に必要な時間が確保できるよう、問題の読解に要する時間を試行調査よりも軽減する。

＜理科（物理、生物、地学）＞

物理については、多様な分野・領域の小問からなる第1問の正答率が予想より伸びなかったことが課題となった。第1問の難易度が高くならないよう、知識の理解を明快に問う問題を中心とする工夫などをする。生物及び地学については、科学的な探究の過程をより重視した問題を中心に出題したところであるが、受検者が問題の内容を理解し解答に至る時間が十分に確保できなかったことが課題となった。文章の更なる精査、資料の示し方の工夫などの見直しを進める。

（マーク式問題）

○外国語科（英語）については以下の通り。

＜筆記[リーディング]＞

発音、アクセント、語句整序等は出題せず、「読むこと」の能力を問うことを目的とした問題で試行調査を実施し、テスト全体として、多様な学力層を識別する好ましい結果となった。

＜リスニング＞

１回読みと２回読みが混在する問題として実施したところ、項目得点と総点とのピアソン相関から判断すると、一定の識別力を確保することができた。

＜配点＞

「筆記[リーディング]」「リスニング」の配点を均等として実施した。得点の分布等については、特に問題はなかったと考えられる。

参考資料1

記述式問題

（国語）

・国語の正答率については、問１が７割程度、問２が５割程度、問３が２割程度を念頭に作問を行い、ほぼ想定通りの結果（図表１参照）となった。

・総合評価（５段階表示）をした各段階の割合（図表２参照）についても、選抜試験として想定していた段階の分布が得られた。

（数学）

・数学の正答率については、３問ともに低かった（図表３参照）が、有識者の意見を踏まえると、数式の記述問題の難易度はそれほど高くなかったと考えられる。記述式問題の難易度そのものよりも、マーク式問題を含めた全体の分量と試験時間のバランスが影響したものと考えられる。

（採点関係）

・採点結果と自己採点の一致率は、国語が７割程度、数学が８～９割程度（図表４参照）と、第１回試行調査とほぼ同程度であった。正答の条件に基づく採点の許容度が十分に周知されていないため、自分の解答が許容範囲なのかどうかの判断に迷ったものと考えられる。

・センターと採点業者の間における採点基準の確定に時間を要したため、採点者の理解を図る十分な時間が確保できず、センターによる検収において、採点結果を補正する例も見られた。

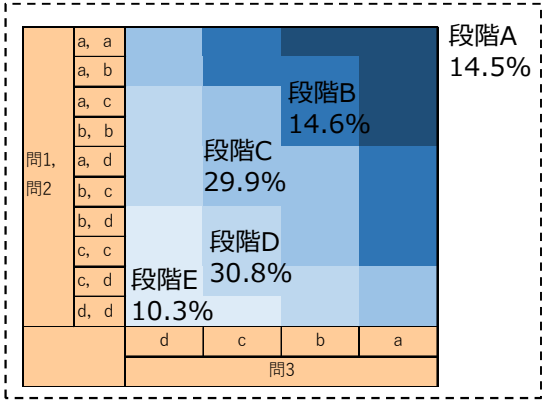
《図表１：小問の段階ごとの割合（国語）》

		小問の段階	割合(%)
問1	a	条件①～③のすべてを満たしている解答	75.7%
	b	条件②，③を満たしている解答（①のみ満たしていない）	0.0%
	c	次のいずれか（①は満たしていても満たしていなくてもよい） 条件②を満たしている解答（③は満たしていない） 条件③を満たしている解答（②は満たしていない）	23.5%
	d	上記以外の解答・無解答	0.8%

		小問の段階	割合(%)
問2	a	条件①～③のすべてを満たしている解答	48.5%
	b	条件②，③を満たしている解答（①のみ満たしていない）	0.0%
	c	次のいずれか（①は満たしていても満たしていなくてもよい） 条件②を満たしている解答（③は満たしていない） 条件③を満たしている解答（②は満たしていない）	40.9%
	d	上記以外の解答・無解答	10.6%

		小問の段階	割合(%)
問3	a	条件①～⑤のすべてを満たしている解答	15.1%
	b	条件①，③～⑤を満たしている解答（②は満たしていない） 条件②～⑤を満たしている解答（①は満たしていない）	2.4%
	c	条件③～⑤を満たしている解答（①，②は満たしていない） または，次のいずれか（①，②は満たしていても満たしていなくてもよい） 条件③，④を満たしている解答（⑤は満たしていない） 条件③，⑤を満たしている解答（④は満たしていない） 条件④，⑤を満たしている解答（③は満たしていない）	26.0%
	d	上記以外の解答・無解答	56.5%

《図表２：記述全体の段階ごとの割合（国語）》



《図表３：小問の正答率等（数学）》

		割合（%）
問（あ）	正答	5.8%
	誤答	76.9%
	無解答	17.3%
問（い）	正答	10.9%
	誤答	44.5%
	無解答	44.5%
問（う）	正答	3.4%
	誤答	34.6%
	無解答	62.0%

《図表４：受検者自身による解答の確認結果》

【国語】（受検者数67,745名）

単位（割合（%））

	一致	不一致
問1	69.4%	30.2%
問2	66.0%	33.4%
問3	70.7%	28.2%

【数学】（受検者数65,764名）

単位（割合（%））

	一致	不一致
問(あ)	90.0%	6.6%
問(い)	83.3%	14.7%
問(う)	88.8%	10.2%

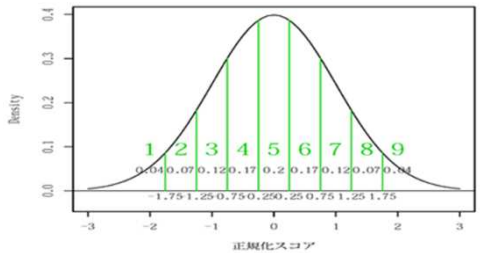
成績表示の在り方

（マーク式問題）

・それぞれの科目の得点を９段階（スタナイン）に換算。素点表示が社会的に浸透している現状を踏まえ、素点表示は維持しつつ、段階別成績表示については当面参考情報として併記し、入学者選抜への活用ができるようにする。

参考：９段階（スタナイン※）のイメージ

※正規化スコアを求めて全体を９分割する、分位点による区分法の一つ。正規分布の場合、−1.75～1.75まで0.5刻みで分けることで、４、７、12、17、20、17、12、７、４%に９分割される。



実施運営面の課題検証

・監督者と実施大学の入試担当課を対象とした実施状況に関する調査結果を踏まえ、記述式問題導入に伴う問題冊子の注意事項の改善や試験日程における試験終了時刻の後ろ倒しなどについて、今後検討していく。